

## 第5学年社会科「南海トラフ地震とどう向き合うか ～自然災害とともに生きる～」

学習指導者 半澤 友博

自然災害が多いことを捉えた子供たちに脆弱性指数を示すことで、「自然災害に対して、誰かが何か対策をしているはずだ」という関心を高め、「自然災害から命や暮らしを守るために誰がどのような取組を行っているのか明らかにしよう」という単元の目標を設定しました。そして、国や県、町などの行政やそれに応える住民の取組を調べたり、関係付けたりしながら、解決していきました。

### 2012年から2025年にかけて住民の防災意識がどのように高くなったのだろう

#### 【見通し】

資料から、防災に関する意識が低い2012年の住民が2025年には高くなっていることに気付いた子供たちは、この間にどのようなことがあったのか課題意識をもちました。そして、友達と交流しながら、社会科のこつ（時間・空間・立場を広げて考える）の中から使えそうなものを選び、「行政の国見さんがどのような取組をしてきたか年表を使って考えればよさそう」などと解決の見通しをもちました。



#### 【行動】

社会科のこつや既習事項を基に個人で考えたり、友達と相談したりしながら考えをつかっていきました。その後全体で、年表や資料を基に「行政の人が津波避難タワーを作り、これなら逃げられそうと思ったんじゃないかな」などと行政や住民の取組により住民の防災意識がどのように高まったのかを捉えていきました。考えを整理する中で、行政が始めた取組がきっかけとなり、住民がそれに応える形で徐々に防災意識が高まるとともに防災に対する取組が広がっていったことをまとめました。



#### 【振り返り】

本時の学習をまとめた後、これまでの学習経験から、社会科のこつと友達との関わり方を視点とした振り返りシートを用いて、学び方について振り返りました。「行政や住民の立場になって考えたから…」などと解決につながった見方・考え方を明確にしていきました。さらに、課題解決に役立った友達のよかったことを書いた付箋を友達と渡し合うことで、友達と関わるよさや自己の貢献を感じていきました。



#### 成果と課題

○社会科のこつヒントカードを手元に準備したり社会科の見方・考え方の具体例を補助黒板に掲示したりすることで、見通しを明確にもつことができ、課題解決に生かそうとする様相が見られた。

▲全体交流の際に、住民の中でも誰の取組や思いなのか整理しながらまとめることで、行政から地区長や学生、そして高齢者というような流れで意識が高まっていったことを捉えられたのではないかな。

